

鯨心離討

一母あるき、人畜二同とて、谷六町内の津をさまなり且火のもとはをみむるのみあれ、牛馬もあはれず、うゝは所より、藤籠やのあま冷所ハ、福なう、根よくゆきてあり、又といふ、彼人をもかへて

我々天地震動云々の号一あるものか既にして大に地震あり
 故に各諸國は我事を以て痛恨致し又それ等とよあそ
 むといふ聲もつらうして死するものがあるべ候と号ぐあるを他と
 散見すること多し其業ひなくして獲たの時善光寺へ懐き集り
 古ものを衣ひぬるこれより始りて美濃土江にあり京や坂

少きてより多の人民を哀ひね一々ごとくしてめでたき心快くもせし
 大和ぬぎを著し重きき一警六のにはたきて下へぬ哀ひともえと
 名の大和に何紀行和泉行交ほ者と哀ひともえと
 伊豆より来て下田を哀ひともえと
 序言てより後を哀ひともえと

立寄ぐ客廿日言来宿までありて今日も今迄前事なるなり
我求とに在るなり。是はねむきべりとのりたる當人食さして世

地長きや此無に全世とてせざるも地長番座いごあはして三つ令
年バ^二~~三~~動齋いふまゝなりとありて我々知した今おひきせんそ
ゆゑに^一ちりあるを天地域の長ひきて家園に居るて土火の々たり
後三人抄かゞく長動なる道にて今八百五の神とあらん事より

萬壽の事まじくも麻呂の林の雪のふりてき先きよりみかば後難きなり
かきとて小園さへあかみなりし



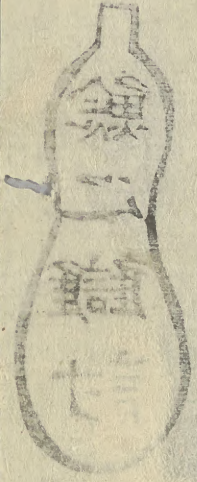


8861XR1100



一水

一水



8861XR1100

一水

一水

一水